
花嫁の兄《あん》ちゃん

まみずくらげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花嫁の兄ちゃん

【コード】

N5686Q

【作者名】

まみずくらげ

【あらすじ】

10歳のときに母親を亡くしたアンちゃんは、父さんに連れられてウチにやってきた。

六歳だった私は、それから、ずっとアンちゃんが大好きだった。

だから、アンちゃんを思い出すとき、私はアンちゃんの笑っている顔を思い出すんだ。

〔1〕

「1」

花嫁控え室に、親戚のおじちゃんに連れてこられた兄ちゃんは、私の方を見もせずに、「きれいだな」と呟いた。

「ありがとう、こんな立派なところで結婚式をさせてもらえて、本当に萌は幸せだよ」

私は、ポケットに手を入れたまま下を向く兄ちゃんの背中が大好きだった。

真面目で、照れ屋で、我慢強い兄ちゃんの、そんな仕草が大好きだった。

初めて、兄ちゃんのそのポーズを見たのは、ずっと、ずっと昔、今日と同じように桜の花びらが風に舞う日だった。今から二十五年も昔のこと。

まだ、十歳だった兄ちゃんは、六歳だった私の方を見ないで、半ズボンのポケットに手を入れて、父さんの後ろで下を向いていた。

私の母さんは、私が三歳のときに白血病で亡くなった。それから、三年後に母さんの姉だった叔母も、同じ病気で兄ちゃんを残して死んでしまった。

施設に預けるといふ兄ちゃんの父親の反対を押し切って、父さんは兄ちゃんを家に連れてきた。

その時に、親戚中が大騒ぎになったのだろうけど、そのことを父ちゃんは死ぬまで何も言わなかった。

水道工事の仕事を一人でしていた我が家は、玄関を入るとすぐに作業場になっていて、水道の蛇口やパイプ、それに工具がごちゃごちゃと置いてあった。

兄ちゃんは、見たことも無い道具に目だけをキョロキョロと動か

していた。

「今日から、お前の兄ちゃんだ。仲良くしろよ」

父さんは、兄ちゃんの肩を掴んで、私の前に挨拶をさせた。

「萌も、ちゃんと挨拶しろ」

何も言わない私と兄ちゃんに、短気な父は怒り出し、兄ちゃんの頭をポカリと叩いた。

驚いた私は、ポカリとやられては堪らないと、「神楽 萌です」と挨拶をしたと思う。

父さんは自分のことを兄ちゃんに、「おじさん」と呼ばせようとしたが、兄ちゃんは「おっさん」と呼んでいた。

お父さんでもなく、叔父さんでもない「おっさん」だ。

最初は、気に入っていなかった父さんも、次第にその夜ばれ方なれて、自分でも「おっさん」と言っていたが、私が、その呼び方をすると、ポカリと頭を叩かれた。

兄ちゃんは、下を向いたまま「下平 剛です」と小さな声で挨拶をして、また、父さんにポカリとやられた。

中学生になった兄ちゃんは、不良になった。学校で喧嘩をするたびに、父さんは、兄ちゃんと怪我をした家に謝りに行き、その間、私は一人で留守番をしていた。

それでも、兄ちゃんが居なくなればいいと思わなかったのは、兄ちゃんは、私には優しくかったからだ。

泣き虫だった私が、兄ちゃんの隣の部屋で泣いていると、必ずドアの向こうから声をかけてくれた。

そして、私が大好きな兄ちゃんパンマンの歌を歌うのだ。音程の外れた歌で、私は悲しいことを忘れて笑ってしまう。何度も、兄ちゃんは歌い、私は飽きることもなく、何度も笑った。

愛と勇気だけが友達さ

兄ちゃんは、「さ〜」の音程が妙に上がる。それが、可笑しくてしかたなかった。

だから、兄ちゃんのことを、私は『兄ちゃんマン』と呼んでいた。

何度か補導もされながら中学を卒業した兄ちゃんは、父さんの知り合いの水道施設会社で働き始めた。

父さんと一緒に働くものだと思ってた私は、家を出して寮に住まず父さんを、意地悪だと責めた。

まだ、小学生だった私には、父さんの気持ちが全然分からなかったのだ。

きっと、兄ちゃんも父さんを恨んだと思う。でも、兄ちゃんは一年もすると、父さんの気持ちが分かったようで、お正月には似合わないスーツを着て、父さんの大好きなお酒を持って来た。

やっぱり、その時も玄関先の兄ちゃんは、ポケットに手を入れて下を向いたまま「あけましておめでとう」とニコニコする父さんに挨拶をした。

三年間、兄ちゃんは大きな水道施設会社で修行をした。大きなビルの配管工事から、まだ下水の完備されていない田舎で浄化槽を地中に埋める仕事も出来るようになった。

兄ちゃんは何も言わないけど、十五歳の子供が、大人の中で仕事をするのは、大変なことだったと思う。叱られたり苛められたりもしたと思う。

それでも、兄ちゃんは頑張った。

ときおり、兄ちゃんが勤めている会社の社長に電話をしていた父の声は、私たちと話す時とは別人のように気弱で、何度も、

「剛のことをよろしくお願いします」と受話器を持ったまま頭を下げていた。

十八歳になった兄ちゃんは、父さんと仕事を始めた。

本当は、まだ大きな会社で腕を磨きたかったのだと思うけど、その頃から、良く寝込んで仕事を休む父さんのことを、放って置けるような兄ちゃんではない。

父さんは、随分と兄ちゃんを怒鳴って「弱虫」呼ばわりまでしたが、兄ちゃんは、そんな父さんの言葉を我慢して、父さんの仕事を手伝うことに決めたのだ。

その頃、中学生だった私は、背も高くなり、男らしくなった兄ちゃん、あまり話を出来なくなってしまった。

そんな私を、兄ちゃんがどう思ったのかも、きつと教えてくれない。でも、悲しかったんじゃないかと思う。

兄ちゃんが、風呂で兄ちゃんパンマンの歌を小声で歌ってるのを聞いた時は、心の中で「ごめんね」と言えたが、それでも、思春期の私には、前のように兄ちゃんと友達のことを話したりは出来なかった。

不良で高校にも行かなかった兄ちゃんを、私は友達に恥じていた。頭のいい兄弟を持つ友達には「本当の兄弟じゃないから」と、平気な顔で言っていた。

私が高校生になって、同じクラスの男の子が好きになってからは、もつと、兄ちゃんのことを嫌いになった。

いや、嫌いじゃなく、邪魔に感じてた。

だから、クラスで兄弟の話になると、私は出来るだけ、その話題の中に入らないようにしていた。

兄ちゃんと、顔を合わす機会が減ったのは、兄ちゃんが、私のそんな気持ちを分かってくれたからだと思う。

本当は、自分の親でもない父さんのことなんて気にせず、家を出て、一人で暮らすことだっただけ出来たのに、兄ちゃんは、この家で、父さんと私のために暮してくれた。

高校二年の秋に、病院嫌いの父さんの癌が見つかった。

お酒が好きで、タバコが好きで父さんに出来た肺と喉の腫瘍は既に手当てをすることが出来ないほど大きくなっていった。

入院を嫌がって、「どうせ死ぬなら、こんな所で死にたくない」と我俣をいう父さん。そんな父さんに怒鳴られながらも、兄ちゃんは、父さんを入院させた。

「なんでも、諦めたら駄目だ。人生なんて何度でもやり直せる。そう言ったのは、おっさんだろう。自分で言っというて、諦めるなんて変だろう」

兄ちゃんの言うことは、ちょっと違うと思ったけど、父さんは必死な兄ちゃんの顔を見て、観念した。

私は、ただ、オ口オ口とするばかりで、どうしたら良いのか分からなくて、父さんの前で泣いてしまった。

そんな私に、兄ちゃんは、肩に手を乗せようとして止め、「大丈夫だから」と、言ってくれた。

私は、そんな兄ちゃんの後ろで黄色い銀杏の葉が揺れているのを悲しい気持ちで見っていたのを憶える。

半年もたずに、父さんは病院のベッドの上で息を引き取った。

苦しそうな顔をする父さんを見て、兄ちゃんは、歯が折れるほどきつく奥歯を噛み締めた。

兄ちゃんは、悔やんでいたんだと思う。入院をさせて、大変な治療をさせたことで、自分を責めていたんだと思う。

私は父さんが死んだ悲しみよりも、兄ちゃんの辛そうな顔が悲しくて、「大丈夫だよ」と、何が大丈夫なのか分からないけど、言ったのを憶える。

そして、父さんの耳元で　愛と勇気だけが友達さ　って、「さ」の音程を外さずに歌った。

〔2〕

「2」

父さんの入院で、我家の経済は逼迫していた。小さな水道施設会社に来る仕事は、それほど利益はなく、兄ちゃんが休みなく働いても余裕など出来なかった。

それでも、兄ちゃんは、高校三年の夏に、私に大学に行けと言い始めた。

今まで、私の進路について何も言わなかった兄ちゃんが、急に「大学に行け」と言い出したのにはビックリした。

それほど勉強が好きじゃなかったから、どちらでも良かったのだけど、兄ちゃんは、「絶対に大学に行け」と言ってきかなかった。

血が繋がってないのに、兄ちゃんは、父さんに似て頑固だった。

珍しく私に命令口調で進学を薦める兄ちゃんに、ちよつと腹が立って聞いてみた。

「なんで、そんなに私の世話を焼くの？」

兄ちゃんはビックリした顔をして、「妹だから」と、言い難そうに言ってくれた。

家に来てから、一度だって私を妹なんて言ったことがないのに、兄ちゃんは、そう言ってくれた。それも、申し訳なさそうに。

私は意外な答えに、なんて言っただけの良いか分からなくなり、なんとなく頷くしかなかった。

「父さんへの恩返しだ」と言われたら、きっと、「私には関係ない」と言い返したと思う。

兄ちゃんの言葉を聞いた私は、今まで、兄ちゃんを恥かしいと感じていた自分が恥かしくなり、兄ちゃんのために、猛勉強をすることにした。

遅ればせながら受験勉強を始めた私は、蝉の鳴き声を聞きながら、クーラーのない部屋で必死に参考書を読んだ。

汗がポタポタと垂れて、ノートを汚す度に、「兄ちゃんは、もつと暑いんだ」と声を出してへこたれる自分を励ます。

指がかじかんだ時には、「兄ちゃんは、こんな日でも水と戦ってるんだぞ」と自分の頬を叩いた。

今までに、こんなに頑張ったことがないほど勉強した私は、無事に志望校に合格し、兄ちゃんを喜ばすことが出来た。

入学式の日、私は兄ちゃんを「一緒に来ない。父兄なんだから」と勇気を出して誘ったが、兄ちゃんは「馬鹿」とだけ言った。

でも、その顔は、今まで見た中で一番嬉しそうだった。私は、その顔を見られただけで、勇気を出した甲斐があると嬉しかった。

大学に入学した私に、兄ちゃんはお小遣いを増やしてくれると言い出した。

高校の時の五千円から一気に三万円にすると言うのだ。銀行から借りた私の学費の返済だけでも大変なのに、なんで、そんなことを言い出したのか、私には分からなかった。

「新しい靴とか欲しいだろう。デートだってさ」

兄ちゃんは、玄関に脱ぎ捨てられた私のスニーカーを見て、何故か不憫に感じたようだ。

お世辞にも美人でもなく、可愛い訳じゃない私は、オシャレにも恋愛にもあまり興味はなかった。

だから、スニーカーも一足が壊れない限り買い換えたいとは思わなかったし、面倒なコンタクトレンズもしようとは思わなかった。

それに、赤いセル縁のメガネも似合っていると、自分では思っている。

「いいよ、私もバイトするから」

兄ちゃんにばかり苦勞をかけたくないと思っていた私は、大学に入っただけでバイト先を探していた。

しかし、授業の都合でなかなか良いバイト先が見つからないまま、夏休みになってしまったのだ。

「バイトも悪くないけど、勉強は大丈夫か」

兄ちゃんは「バイトする」と言うと、ちょっと顔を曇らせた。

「社会勉強は大事でしょう」

少しは家にお金を入れたいなんて言ったら、きっと兄ちゃんは、今よりも無理をして働くに決まってる。今だって、他の会社が遣りたがらない仕事を引き受けて、休みもなく働いている。

元請の工事会社の人も、あまりに働く兄ちゃんを心配するぐらいだった。そんなに、心配してくれるなら、無理な仕事を回さないで欲しいと、内心想っていたが、兄ちゃんは、「仕事をしないと、腕が上がりませんから」とお礼を言うばかりだ。

兄ちゃんの目標は、死んだお父さんなのだが、私の目から見れば、お酒を飲むこと以外は、もう父さんを超えている。

結局、私と兄ちゃんは話し合いの結果、お小遣いを一万円として、私はバイトを探すことになった。

でも、探す、探すと言いながら、兄ちゃんのお弁当を作って現場に持って行く夏休みを過ごしていた。

夏休みの終わりに、兄ちゃんの現場に行くと、年上の女の人と話をしていた。

照れ屋の兄ちゃんは、女の人と話す時はいつも以上に怖い顔になり、私はそれを見ているだけでハラハラするのだが、その日はちょっと違った。

他の人にはその違いは分かりづらいかもしれないけど、兄ちゃんは、ちよつと笑っていた。

さりげなく、兄ちゃんの傍で聞き耳を立てると、その人は、建てている家の奥さんで、奥さんは、キッチンの位置について兄ちゃんに相談していたのだ。

「設計変更は難しいかもしれませんが」

設計図を描いたり、直したりは水道屋さんの仕事じゃないから、兄ちゃんは、ちよつと困っていた。

「そうですね、でも、主人が『水道屋さんに聞いてみる』って言うんです」

奥さんの顔を良く見ると、目が真っ赤に充血して、それが白い肌に尚更痛々しく映った。

兄ちゃんも、そんな奥さんの様子に何かを感じたようで、自分では何も出来ないのに、熱心に相談に乗っている様子なのだが、その顔が、何故か満更迷惑そうでもないのが、私にはなんだか、納得できない気持ちだった。

兄ちゃんの説明に納得した奥さんが、深々とお辞儀をして現場から離れると、その後ろ姿を見ている兄ちゃんに私は聞いた。

「美人だね」

私の存在にすら気づいていなかった兄ちゃんは、不意に声をかけられて、「美人だな」と、つい本音を言って、すぐに「別に」と訂正したのだ。

その後、暇な私が現場をウロウロしていると、兄ちゃんの様子がちよつと違った。

怒っているのかと思うほどの勢いで仕事をするのが常の兄ちゃんの動きが遅いのだ。

配管をするパイプを持つては、何か考え事をするように首を傾げる。そして、一度繋いだパイプを切つては、また首を傾げる。

兄ちゃんの様子が変なのに気づいたのは私だけではなく、春から一緒に仕事を始めた十五歳の俊之くんにも分かったようで、いつも以上に怯えて、私に「何かあったんですか」と尋ねるほどだった。

私はなんだか嫌な予感がしたが、そのことを、兄ちゃん尋ねることなどで出来はしない。

翌日、私が弁当とお茶をもって現場行くと、兄ちゃんはネクタイに作業着を着た工務店の金田さん喧嘩をしていた。

金田さんは、大手の建築会社を辞めて、今の工務店に入った。

「設計図面は完璧です。僕がこの会社にスカウトされたのも、この設計図面の力なんですから」

そう言つて、現場の言うことを聞き入れず、大工の棟梁や足場を組む鳶の人たちに、嫌われていた。

そんな金田さんの悪口も、兄ちゃんは言ったことがない。

元々不良だった兄ちゃんは、すっかり更正して、誰かと口喧嘩さえしていなかったのに、その日の兄ちゃんは、違っていた。

「ざけんなよ、金のためだけに仕事してんじゃねえんだよ。ちよつとぐらい儲けが減ったって、施主さんが満足しないような仕事をしたくはねえだ」

下から睨みつける様子は、二十年近く前の兄ちゃんの姿だった。

「しかしねえ、剛さん」

いつもは横柄に兄ちゃんの仕事にケチをつけていた金田さんは、必死で強がっていたが、顔色はすっかり蒼くなり、今にも腰から落ちそうだった。

「いいか、この配管をここに動かして、発注してたキッチンを違うのに変えれば済むことだろうよ。何も基礎や梁をやりかえろって言っちゃいねんだ。」

ガス屋が文句を言うなら、俺が話をつけてやるよ。

てめえは、施主さんの喜ぶ家になるように、図面を書き換えればいいんだよ。

分かったか、徹夜してでも、明日まで書き直して持って来い」

胸倉を突き飛ばす勢いで、金田さんを追い返した兄ちゃんに、恐ろしく寄って来たのは、大工の棟梁だった。

兄ちゃんより二十年先輩の棟梁も、兄ちゃんに負けないぐらいに不良だったと、父さんから聞いていたが、その棟梁でさえ、肩で息をする兄ちゃんにびびっている。

「剛、そんなに熱くなるなよ」

兄ちゃんとの距離を測りながら、声を掛けるあたりは、さすがに棟梁も喧嘩の達人だと、感心した。

「あの馬鹿には、一度言つてやらなきゃなんなかつたんです。」

俺は、棟梁と違って、水道しか出来ないけど、それでも、この家に住んでくれる人に喜んで貰いたいですから。

水漏れなんてあつたら、大金を使って家を買った人に申し訳ない

じゃないですか。

どんな小さな家だって、俺なんかじゃ手の届かない大金を使うんだ。ましてや、こんなに立派な家ともなれば、ちよっとの我侂だって言いたくなるでしょう。

それを、あの馬鹿は、予算だ工期だって言うばかりで、現場の言うことも、施主さんの言うことも聞きやしねえ。

そんな仕事がしたいですか」

怒りで真っ赤だった目から、涙が零れた。

兄ちゃんの涙を見たのは、これが三回目だったと思う。

一度目は、初めて家に来たときに、お父さんと三人でお風呂に入った時に泣いていた兄ちゃん。

二度目は、お父さんの亡骸にしがみついて、謝ってた兄ちゃん。

兄ちゃんは、寂しくて泣いたり、悲しくてないたりはしない。兄ちゃんが泣くのは、感謝している時だった。

でも、今度の涙は違っていた。でも、その涙の訳が分かったのは、もう少し後になる。

兄ちゃんの涙に押された棟梁は、結局、何も言わずに兄ちゃんの肩を叩いて仕事に戻った。

その様子を見ていた私と俊之くんの傍に近づいてきた兄ちゃんは、照れ臭そうないつも笑顔で、「早いけど、飯にするか」とだけ言った。

そのまた翌日、私がいつもよりかなり早く弁当を持って現場に出掛けると、今度は工務店の社長の鵜飼さんと兄ちゃんが立ち話をしていた。

七十過ぎの鵜飼さんは、お父さんの代からの付き合いで、お父さんを弟分のように可愛がってくれた。

だから、父が朝帰りをした翌日は、必ず鵜飼さんから電話があり、「遅くまで連れまわして済まなかったな」と子供だった私にもお詫びをしてくれた。

そんな鵜飼さんからすれば、二十四歳の兄ちゃんは孫みたいなも

のだったのかもしれない。

そんな生意気な孫の話を、鵜飼さんは余裕の笑顔で受け流している様子で、兄ちゃんの言うことに小さく頷いてはタバコを吸っていた。

きつと昨日の話しだろうと思って近くまで言った私に、鵜飼さんは、「おう、萌ちゃん、いい女になったな。これじゃ、剛も頑張るはずだ」と的外れなことを言うが、私はちよつと嬉しかった。

そんな鵜飼さんの冗談に慣れている兄ちゃんは、顔色も変えずに、私を目で追い払うと、また、鵜飼さんに熱心に話を始めた。

炎天下に流れる汗も気にしない兄ちゃんの根気に負けたようので、鵜飼さんの顔はちよつと、呆れたようになり、兄ちゃんの頭をクシヤクシヤにして帰って行った。

仕事の指示を待つ俊之くんと、お弁当を下げた私のところに来た兄ちゃんは、「ビールを二十本ぐらい買って来い」と言つて俊之くんに財布を投げつけた。

兄ちゃんの、その顔はとても嬉しそうだった。

昼時に大工さんや左官屋さんにビールを配った兄ちゃんは、午後から新しく配管を引きなおしていた。

どんな話が鵜飼さんと兄ちゃんの間にあつたのかは、分からないけど、兄ちゃんが嬉しそうに仕事をしているのだから、きつと良いことなのだとも私も嬉しくなった。

そんな苦労した家が完成したのは、秋風が吹き始めた頃だった。学校の帰りに、遠回りをして完成した家を見に行くと、そこには、新品の作業服を着た兄ちゃんが、美人の奥さんと話をしていた。

恋愛には疎い私にも、二人は水道屋さんと施主さんという感じには見えなかった。

兄ちゃんに気づかれないように走って家に帰った私は、その日から兄ちゃんの顔をまともに見られなくなってしまった。

そんな私の様子に気づかない兄ちゃんは、ちよつと浮かれた感じで、鼻歌なんか歌いながら仕事に行くようになり、今までは充電さ

えも忘れる携帯を、いつもポケットに入れている。

今まで、兄ちゃんに恋人がいたのか、いないのか分からないが、不良時代の兄ちゃんの周りには、化粧が似合わない中学生が屯しては、ヘラヘラと笑っていたのを、私は気持ちが悪くなる思いで見ている。

不良で夜遊びばかりしていた兄ちゃんだが、私は兄ちゃんが実は二十四にもなつて童貞ではないかと思っていた。

そんな兄ちゃんが、どうみても十歳以上上の人妻を好きにならなくてはいけないのか、私にはまったく理解できない。

それは、鵜飼さんも同じだった。

冷たい雨がふる夜に、一升瓶と寿司を持った鵜飼さんが現れ作業場で酒を飲みながら、兄ちゃんに言い難そうに話を始めた。

大人が作業場で酒を飲んでる時は、子供は奥にいるものだと、亡くなった父さんに言われていた私は、二十歳の大人になつても、その言いつけを守り、覗き見をした。

「これは、現場で耳にした話だから、信じちゃいけないがな」

口に含んだ日本酒を喉に流し込んだ鵜飼さんは、「ううん」と更に言い難そうに唸る。

「まあ、与太話だとは思うが、お前が前に設計変更までしたお屋敷の奥さんと、いい仲になつたつて言うヤツがいてよ」

奥さんの話を切り出された兄ちゃんは、顔を赤くして「そんなんじゃないんです」と、言うだけで、しばらく二人は黙ってしまった。

また、口に含んだ日本酒をゴクリと飲んだ鵜飼さんは、

「野暮なことを言うつもりはねえ、男と女に、あれはいけねえ、これはいけねえなんてのは、通用しねえのは分かってるんだ。

人さんの嫁だからって、顔を見ないわけにもいかねえんだからな。でもな、惚れるにも覚悟があることあるんだぜ」

エロ話や面白くない冗談ばかり言う鵜飼さんの「覚悟」という言葉には、迫力があつた。

それは、生半可な覚悟じゃ許されない重い「覚悟」。

黙って聞いていた兄ちゃんは、観念したように頭を下げて「すんませんでした」とあっさり、奥さんとの関係を認めたのだ。

「最初に会った時に、いい匂いがしたんです。いったい何のにおいだろうって、ずっと考えてたら、思い出したんですよ。」

母さんがつけてた化粧品品の匂いに似てたんです。

顔や声は、いつも思い出すのに、匂いだけは思い出せなかった。それが、恵さんからしたんです。

そしたら、この人の願いは絶対に聞いてやらなきゃいけないと思って、鵜飼さんにも無理を言いました。すいません」

十歳で母親を亡くした兄ちゃんには、私よりも母親の記憶が多いことに、改めて溜息が出た。

私の記憶にある母親の顔は、きつと、子供の頃に毎日のように見ているアルバムの中の顔で、声も匂いもしない。

「まあ、あれは、先方さんも喜んでくれたんだからいいじゃねえか。おれも、あの方がキッチンとしちゃ明るくて使いやすいと思うぜ」

鵜飼さんは、今では自分で現場を仕切ることはないが、昔は腕のいい職人だったと父さんは尊敬していた。

「それから、何度か恵さんとキッチンの仕様なんかで話をするようになって、つい」

兄ちゃんは、作業場の冷たいコンクリートに土下座して鵜飼さんに謝った。

「おいおい、俺に謝ることじゃねえよ。それに、俺もあの人の旦那を知っているが、横柄で人を見下したような、嫌なヤツだったから、まあ、よくあんな男と結婚したもんだと思っただくらいだ」

鵜飼さんが椅子に座れと促しても、兄ちゃんは地べたに正座したまま、何度も鵜飼さんに頭を下げ「なんだか、恵さんを泣かすヤツが許せなくて」と、拳を握り締めた。

「いいかい、剛。同情もいい、それも惚れたうちだ。でもな、命をかけて守る覚悟がなくちゃならねえんだぞ。そんなことを、その人が望んでるのか。きつと、望んじやいねえよ。」

そんなことは、お前だつて分かつてんだらう。だつたら、あんまり傷が深くならないうちに別れるのも、愛つてやつじゃねえか。いいか、明日行って、思い切り振られて来い。振られるのは、男の仕事だ。未練は、男が持つてやらなきやな」

鵜飼さんが、少し酔つた足取りで作業場を出て行くと、兄ちゃん
は四回目の涙を流した。

〔3〕

〔3〕

兄ちゃんとその人が、どんな別れ方をしたか知らないけど、冬になっても、兄ちゃんは携帯を片ときも手放さなかった。

何しろ、防水でもないのに風呂まで持って行き、直ぐに買い換えたくらい、兄ちゃんは鵜飼さんが言ったように未練を背負ってた。

そんな兄ちゃんを見ているのは辛かったけど、そんなに兄ちゃんに想ってもらえるその人に、ちょっと憎らしい感情もあった。

私の方はというと、サンドイツチ屋さんのバイトが決まり、朝早くから自転車で商店街に向かい、サンドイツチを作っていた。

朝寝坊な私が自転車で飛び乗ると、必ず兄ちゃんは「慌てて転ぶなよ」と声をかける。

いまだに、小学生六年生の時にガードレールにぶつかったことを気にしているのだ。

私の脛には、今でも薄く傷が残っている。言わなきゃ、ほとんど気づく人がいないほど薄い傷なのだが、兄ちゃんは、その傷跡を見るたびに、「ごめんな」と、本当に申し訳なさそうに謝る。

この傷が出来たのは小学六年生の時で、兄ちゃんにゲームを買ってもらいに行く途中のことだった。

自転車を漕ぐ私の横を、兄ちゃんは息も切らさず走ってくれた。

兄ちゃんが嬉しそうに走るのを、調子に乗った私は、運動神経が良いい訳じゃないのに、前も見ないで緩い坂道を立ち漕ぎで下り、ガードレールに見事激突。

幸い、車通りの少ない裏道だったので、脛から血を流すだけで済んだのだが、私は大泣きをした。

痛いのとビックリしたので、兄ちゃんの心配する顔が滲んで歪むほど涙を流して泣いた。

兄ちゃんは首から下げていたタオルを私の脛に巻くと、私をおぶって家まで走った。私はその間、泣きながらも「ゲームは」と、ちやっかりしたことを言っていたそうだが、それは記憶に無い。

それから、近所の診療所で手当てを受けた私に、兄ちゃんは何度も「ごめんな」と自分のせいでもないのに謝り、その姿を面白がった父さんは、「傷物にしたんだから、責任とって嫁にもらえよ」と兄ちゃんをからかった。

父さんの言った「嫁にもらえよ」に兄ちゃんがなんて答えたのかも、残念ながら記憶にない。

そんな風にして出来た傷を、ときおり触っては、あの時の答えを思い出そうとするのだが、やっぱり、痛かったことしか思い出せない。

それ以来、兄ちゃんは、私が自転車に乗るたびに「慌てるなよ」と声をかける。

私は兄ちゃんの声を背中中で聞きながら「分かった」と叫び返すのだが、ちよつと転んでみようかなと悪戯心がうずくのだ。

そうして通うサンドイツチ屋で、私は初めて恋をした。

同級生や先輩にほのかな恋心を抱いたことはあったが、告白なんて考えたこともない。

そんな恋愛音痴な私が好きになったは、バイト先の店長だった。店長なのに遅刻はするし、居眠りをするようなチャランポランな人で、顔だって、それほど良くはない。

そんな人をなんで好きになったのか、自分でも良く分からないのだが、なにしろ好きになったのだ。

ヨレヨレのジーンズしか持っていなかった私が、久しぶりに買ったジーンズは、お尻の形がクッキリと分かる流行のスタイル。

作業場にある大きな鏡をみながら「これは、ないかな」と呟く私の後ろに、困った顔の兄ちゃんが映っていた。

「似合わないよね」

お尻を隠すように振り返る私。

「いいんじゃないか」

下を向いてポケットに手を入れる兄ちゃん。

「じゃあ、バイトに行くね」

私がパツパツのお尻にムズムズとするのを感じながら、作業場を出ると、やっぱり、後ろから「慌てて転ぶなよ」と声が聞こえた。

どうしようもない二十六歳の男に恋をした私は、居眠りをする彼の分まで、食パンの耳を切ってサンドイッチを作った。

彼が考えた【小倉フルーツサンド】は、私たちバイトの不評に反して、良く売れた。彼の突飛なアイデアが、いったい何処からくるのか、新しいことを考えるのが苦手な私は、不思議でならない。

飲食店の店長なのに、無精髭を生やしていた彼に、告白のチャンスは突然現れた。

その時は、私と店長だけでラストをすることになった。店の片付けをしていた私に、大量にパンの耳が入った袋をかざした店長は、満面の笑みで言ったのだ。

「お腹減ってないか？」

お腹は減っていたが、パンの耳を貪るほどに減っていた訳ではない。なんて答えようか困っていた私に、店長は「油で揚げると美味しいんだぞ」と、せっかく洗ったプライヤーに油を入れて、パンの耳を放り込んだ。

「学生の頃、前の店長が作って貰ったんだ。カリカリに揚げたパンの耳に、砂糖とか塩とかつけて食べると、すごく旨いんだ」

彼はお金がなかった学生の頃のことを話しながら、手際よくパンの耳を揚げると、砂糖をまぶして私の口に差し込んだ。

驚いた私は、思わず「店長が好きです」とパンの耳を啜えたまま、告白したのだ。

言った私も驚いたが、言われた店長は揚げたてのパンを掴んで、火傷をするぐらいに驚いた。

告白をしたものの、その後はどうしたら良いか分からない私が、パンの耳を啜えたまま目を丸くしている様子は、今考えても顔が赤

くなるほど滑稽だったと思う。

そんな私に店長は、「特製ラスク、持ってかえりなよ」と、聞こえない振りをしてくれた。

自転車籠いっぱい【パンの耳ラスク】を持って帰った私は、作業場で明日の支度をしていた兄ちゃんに、パンの耳を見せた。

「バイト先で貰った」

全身の力が抜けた私の言葉に、兄ちゃんは何かを感じたようでした。いつもなら食べない甘いラスクを「美味そうだな」と、ムシヤムシヤ食べてくれた。

「いい人だな。パンの耳を大切にするなんて」

しみじみとした口調で言うと、私の口に店長と同じようにパンの耳をねじ込んだ。

ねじ込まれたパンの耳は、砂糖が固まっただけで甘いはずなのに、泣き虫な私は涙が零れた。

「兄ちゃん、人を好きになるのって、なんでなんだろうね」

恋愛のことを、兄ちゃんに聞いても無駄なことは分かってる。

「分かんねえな。考えても分かんねえから、きつと、頭じゃねえんだろう」

兄ちゃんは笑って教えてくれた。

「そうだよ、頭で好きになるんじゃないから、考えても仕方ないね」

なんだか、ほっとした。

恋愛初心者の私は、どうして店長が好きなのか何度も考えてぬ眠れなかったり、いったい、自分がどうしたいのか答えが知りたくて悩んだ。

でも、好きになるのは、頭ではなくて心なのだから、考えても答えなんか出ない。

心には考えることなんか出来なくて、感じることしかできないんだから。ドキドキするのも、ワクワクするのも頭じゃなくて心だと思う。

私が突然、予告もなく告白したのも、兄ちゃんが、あの人を好きになったのも、心が勝手にワクワクドキドキしたからで、頭で悔やんだりしても仕方が無い。

「ビール飲む？」

私が、頑張っつてパンの耳を齧る兄ちゃんに言つと、兄ちゃんは嬉しそうに笑つて「つまみにはならないな」と、また、私の口にパンの耳をねじ込んだ。

〔4〕

〔4〕

クリスマスもお正月もいつもと変わらず、兄ちゃんと私はテレビを見て過ごし、私のバイト先だったサンドイッチ屋は経営不振で閉店した。

後には百円ショップが出来て、私はそこで働こうかと思ったけど、店長がいないあの場所に行く気にはなれず、結局春休みも兄ちゃんの現場にお弁当を持って行く毎日を過ごした。

そんなぐーたらな私に、兄ちゃんは何も言わず、美味しいとは自分でも思えないお弁当を食べてくれた。

春だと言うのに、私にも兄ちゃんにも春めいた話もなく、夏になっても情熱的なこともない。そして、また冬が来て、私は花屋さんで短期のアルバイトをすることになった。

その花屋さんは駅前の小さな店で、前は立ち食い蕎麦屋さんだった。

かき揚げ天ぷら蕎麦の大好きな兄ちゃんは、仕事の帰りに俊之くと、よくその店に寄っていた。仕事が休みの日は、私も兄ちゃんと食べに行った。

「もつと、美味しいもんを食べようぜ」と、兄ちゃんは寿司やイタリアンを提案してくれるのだが、私は兄ちゃんと並んで蕎麦を啜るほうが特別な気がしてた。

ふーふーと熱い蕎麦に息を吹きかけ、一気に口いっぱい蕎麦を食べる兄ちゃんに負けられないように、私もキツネうどんを必死で食べるのだ。

五分もかからない私と兄ちゃんの夕食。

そんな兄ちゃんの大好きな蕎麦屋のお爺さんが、引退をしてお孫さんが花屋を始めたのだ。

不良時代から長年のご臍肩だった兄ちゃんは、格安の値段で水道の工事を請け負い、そんな関係で私がバイトを始めることになったのだ。

仕事から帰ってきた兄ちゃんが、不機嫌そうな顔をしながら私に言った。

「寒いし、水仕事だけど、やってみるか。短期だし」

確かに、その日は十二月でも寒い夜だった。でも、兄ちゃんの不機嫌な顔が、実は照れ隠しであることは、長年兄ちゃんの顔を見ている私にはすぐに分かる。

「いいけど、どうして急に」

バイトをしるなんて言ったことがないどころか、出来ればしなくてよいと言うぐらい感じだった兄ちゃんの照れている理由が聞きたくて、ちよつと聞いてみた。

「綾瀬さんがな、ちよつと困ってるみたいです。暮れは花屋が忙しい時期だけど、今のところ安い時給しか払えないから、バイトをしてくれる人がいないらしいんです」

兄ちゃんが変な丁寧語を使うのは、きつと、綾瀬さんが好きなんだと私は直感した。

恵さんの時も、もつと前に中学の時に家庭科の先生に憧れてた時も、兄ちゃんは変な丁寧語で言い訳をしていた。

「綾瀬 さん 和さんですか」

私は兄ちゃんの変な丁寧語をもつと聞きたくなくて、その人のフルネームを言った。

「ええ、その綾瀬 和さんが困っているんで、ちよつとの間、助けてあげるのも悪くないのではないでしょうかと、僕は思うんです」

椅子にキチンと座って話をする兄ちゃんの様子に、仕事道具の片付けをしていた俊之くんは、完全に怖がってしまい。パイプ用のレンチを足の上に落としてしまうほどだ。

「畏まりました。微力ながら、私、神楽 萌がお手伝いさせていただきます」

私も椅子の上に正座して笑いを堪えた。

そして、十二月の半ばから私は花屋でバイトを始めたのだが、花に詳しいわけでもない私が出ることは、言われたとおり花に水を撒くことと、贈り物にする花を専用のダンボール箱に詰めることだけだった。

バイトを始めて分かったのは、こんなにも花を扱う人がいることと、花をお歳暮にすることがあるということだった。

冬の定番はシクラメンとポインセチア。クリスマス近くになると、ヒイラギも売れた。

素焼きの鉢とダンボールで私の手をガサガサになり、そのひび割れた手に水やりの水はいつそう冷たく感じる。

そんな私に、和さんは温かいホットチョコレートをご馳走してくれる。ミルクとチョコレートが喉を通りお腹の中に納まっていくのが分かる。

ちよつとだけ、暇な時間に、私と和さんはホットチョコレートを飲みながら、話をした。

二十九歳の和さんは歳よりも若く見えるが、話していると歳より大人に感じる。そんな和さんに、なんで花屋をやろうと思ったのかを聞いたことがあった。

「一人で子供を育てるのに、仕事をしなきゃいけないからでしょう。でも、外に働きに出ると、なかなか自由が利かないから、自分で何かしたかったの。」

花屋になつたのは、偶然。

通りかかった花屋さんに「お仕事楽しいですか」ってなんだか聞いてみたの。そしたらね、そのお爺さんの花屋さんは「楽しいですよ」って本当に素敵な笑顔で答えてくれてね。

「私にも出来ますか」って聞いたら、その人、「やってみますか」って言ってくれたのよ」

和さんは、そんな簡単に自分の仕事をみつけたのだと、私は不思議でならなかった。

春になると大学三年になり就職のことも真剣に考えなくてはならないと思っていたが、何がしたいのか見当もつかずにいたからだ。「そんなに簡単に決めて良かったんですか」

私は今後のために尋ねた。

「そうね。でも、私を花屋に誘ってくれたお爺さんの言うことは間違いないような気がしたの。

きっと、楽しいんだろうな、ってね。

それに、娘の円も花屋さんになりたいって言うてくれたし」

和さんは、二十歳で結婚して円ちゃんを産み、五年で離婚した。

それから、和さんは一人で円ちゃんを育てながら花屋で働いて、やっと小さな店をもてたのだ。

そんな人を兄ちゃんが放っておくはずがない。だから、兄ちゃんは、ときどき仕事に行く前に花屋によっては、花を買い、新築の家にプレゼントをしては、宣伝していた。

頑張るシングルマザーを応援するのは、私も大賛成なのだが、きっと兄ちゃんは、和さんに恋をしている。そんなことは、兄ちゃんの顔をみれば誰だって分かってしまう。

年上で子供がいるけど、和さんは美人だし性格もいい。私は今度こそ、兄ちゃんの想いが伝わるといいと思っていた。

クリスマスの夜に、兄ちゃんは大きなケーキを持って花屋にやってきた。

「ちょっと知り合いに頼まれて買ったんだけど、甘いのは苦手だから」

ケーキ屋に知り合いなんていないはずの兄ちゃんの考えた言い訳に、私は笑いを堪えるのに必死だった。

「ありがとう。でも、家も娘と二人じゃ食べきれないわ」

和さんは大きなケーキの箱を両手に持って困ってしまった。

「うちでみんな食べませんか」

余計なお節介かもしれないけど、私は兄ちゃんの恋を応援したかった。

「馬鹿、ご迷惑だろう、あんな掃除もしてない家に」
兄ちゃんの言うとおり、うちは散らかっている。

掃除は私の当番で、掃除の苦手な私がする家が綺麗なはずがない。
「ありがとう、でも今日は娘とレストランでご飯を食べる約束をしてるから。」

出来たら、このケーキは半分だけ頂けないかしら」
和さんの提案に兄ちゃんは「きつと円ちゃんも楽しみにしてるね」と言いながら、ちょっと残念そうなのを私は見逃さない。

そうして、半分のケーキを持って帰った兄ちゃんは、ついでに鳥の唐揚げも大量に買っていった。

ケーキを前にした兄ちゃんに、「ビールでも飲む」と私が言うと、「そうだな」となくなった半分を見つめて上の空で答えた。

半分のケーキをはさんで座る私と兄ちゃんに、俊之くんは言い難そうに「デートなんで」と言っただけでそそくさと帰ってしまった。

ビールを注ぎながら、私は兄ちゃんに言った。
「来年は和さんと円ちゃんの三人でクリスマスが出来るよ」

確信も予感もなかったけど、希望だけで言うと、兄ちゃんは苦笑いして首を振り、泡が多いビールをコクコクと喉を鳴らして飲んだ。
大晦日まで私は花屋で働いた。

特に初詣の予定もない私は、そわそわとする街で花を売るのが楽しいと感じていた。

小学校が休みになった円ちゃんも、私より手馴れた手つきで小さな盆栽を店先に並べてお手伝いをする。

「玄関に万両の盆栽があると、華やいだ新年になりますよ」
円ちゃんは、誰に教えられたのか上手いこと盆栽を売りさばいた。こまっしやくれた言葉に、通りかかった人達は立ち止まり、つい買うつもりもなかった盆栽を買ってしまうのだ。

「円ちゃんは、本当の花屋さんみたいだね」

ダンボールに花をいれるしか出来ない私が、感心して円ちゃんに言うつと、円ちゃんは不満そうに「花屋さんだもん」と口を尖らす。

その生意気な仕草が、和さんの横顔に良く似ている。

私が欠伸をしたり爪を噛んだりしたときの顔は、亡くなった母親に似ているのだろうか。私の知っているお母さんはいつも正面を向いた写真だけだから、兄ちゃんがみている横顔や、俊之くんが見る後ろ姿が、お母さんに似ているのかは分からない。

「お母さんに似て、円ちゃんは美人だね」

私は、ついそんなことを言ったのを、今でも鏡を見るたびに思い出す。

大晦日はさすがに早くに店を閉めると、待っていたように兄ちゃんがやってきた。

ジーンズにダウンを羽織った兄ちゃんは、相変わらずポケットに手を入れたまま小さく和さんに会釈した。

「萌、正月はなんか予定あるのか」

兄ちゃんは私に予定などないことを知っているはずなのにボソボソと尋ねた。

「暇なら、温泉でも行こうか。近場だけど」

兄ちゃんはパンプレットを見せてくれるが、気の効かない私は言葉通りにしか理解できず「いいね」と単純に喜んでばかりだ。

その様子を見上げるように聞いていた円ちゃんのちよっと、羨ましそうな顔なんて気づかない。

「円ちゃん、温泉好きか」

兄ちゃんは鈍感な私からパンプレットをひったくると、円ちゃんに湯気が上がる大きな露天風呂の写真を見せる。

「うん」

ちよっと間が空いてから、円ちゃんは和さんの顔を見ながら返事をした。

「一緒に行くか」

兄ちゃんは、最初から和さんと円ちゃんを誘いたかったのだ。やっと気がついた私は、「そうだよ、みんなで行こうよ」と和さんを強引に誘い、「でも」と何度も断る和さんを「日帰りなら」と言う

ことで連れ出すことに成功した。

「それじゃ、2日の朝にここで」

返事が変わるのを恐れたのか、兄ちゃんは、私をおいてさっさとひとりで帰ってしまった。

テレビばかりを見て元日を過ごしている私の前で、兄ちゃんは明日の支度をしていた。

「ずいぶんとお菓子を買ったんだね」

円ちゃんが退屈しないようにと、車の中で見るアニメまで借りてきた兄ちゃんは、何度も鞆の中を詰め替えていた。

「お正月にどこも行かないのって寂しいだろう。俺はおっさんに、いろんなとこに連れてってもらったからさ」

亡くなったお父さんは、夏休みやお正月には必ず兄ちゃんと私を何処かに連れて行ってくれた。雪が降る遊園地には本当は行きたくなかったけど、お父さんは「行くぞ」と決めたら天気なんか関係なく行く人だった。

兄ちゃんは、そんなお父さんに付き合っつて、不良になってしまった中学生の時も真夏の動物園にも来てくれた。

ものすごく臭くても、兄ちゃんは父さん作ったオニギリをサル山の前でムシヤムシヤ食べていた。

だから、兄ちゃんは円ちゃんを何処かに連れて行きたかったらしい。でも、温泉と言うのは、いささか下心が見えてしまう。

当日は天気も良く穏やかな気候だった。

私と円ちゃんが後ろの席に座り、助手席には和さんを座らせた。

無口な兄ちゃんは、いつも以上に無口な男になりひたすらハンドルを握り、和さんの話しに相槌を打つのだ。

「下平さんは、恋人はいないんですか」

和さんの質問に円ちゃんと一緒にアニメソングを歌っていた私は聞き耳を立てた。

「はい」

「なんで作らないの」

「ええ、まあ」

「楽しまないと後悔しますよ」

「そうですか」

「私には円がいるから、それで十分だけど、一人じゃ寂しいし、楽しくないもの」

「そうですね」

そんな風に話が弾まないまま温泉に着いた。兄ちゃんは無口だけど決して退屈な男じゃない。兄ちゃんと話していると、どんどん心が緩んで来る。それは、兄ちゃんの心がいつも誰かを暖めてあげようとしているからなんだと思う。

どうすれば、兄ちゃんみたいになれるのか、それは分からない。

そんな兄ちゃんの心の中にある暖炉みたいなものは、きっと和さんにも分かかって、「はい」とか「ええ」とかしか言わないのに、兄ちゃんに話しかけてしまふんだと思う。

日帰り温泉から帰って何日かすると、和さんと兄ちゃんを蕎麦屋で見かけたと俊之くんが教えてくれた。

「剛さんは、相変わらず天ぷら蕎麦を食べて、和さんはとろろ蕎麦らしきものを食べてましたよ」

俊之くんの情報はそれだけで、二人がどんな雰囲気だったか分からないが、きつと、あの温泉の時と同じように、和さんが話をして、兄ちゃんが頷いていたんだと思う。

どうやって告白して、いつから付き合っ、これからどうするつもりなのか、私は聞きたくてしかたなかったが、きつと聞いても、

「まあな」として答えてくれないのは分かっていた。

和さんと兄ちゃんの二人に手を繋がれた円ちゃんのことを思うと、心から「良かったね」と言いたい気持ちと、自分だけ手を繋ぐ相手がいない寂しさが混ぜこぜになって、泣き虫な私は布団の中でシクシク泣いた。

〔5〕

〔5〕

兄ちゃんと和さんの交際は、仕事仲間の間でも評判になり、私の耳にも「本当の親子みたいに公園にいたぜ」とか、「あんなに幸せそうな剛さんをみたのは初めてだ」なんて聞こえてきた。

いつか二人は結婚するんだろうなと、私も覚悟を決めた。

そして、私の得意料理であるカレーをお代わりする兄ちゃんに、私がいちいち切ったのは、大学三年の夏のことだった。

「兄ちゃん、私、家を出て独りで暮そうと思うんだ」

突然のことに、兄ちゃんはカレーを口に入れたまま固まってしまった。

「ここは萌の家なんだ。俺は十歳の時からずっと居候させてもらってる。だから、お前が家を出るなら、俺もこの家にはいられない。

いつか、お前が結婚して、この家に旦那さんと住むのが筋だからな」

兄ちゃんの『居候』という言葉が、私は無性に頭に来た。

「兄ちゃんは、居候さんなの？ 十歳の時からずっと、そう思ってたの」

悔しくて、また泣いた。初めて兄ちゃんを男らしくないと思った。「おっさんや、萌は家族だと思ってる。俺を捨てたクソ親父なんてなんとも思っていない。でも、やっぱり、この家は神楽の家で、俺は下平だから」

兄ちゃんの言いたい事は、私にだって分かる。分かるけど、そんなのは男らしくない。

「じゃあ、兄ちゃんが出て行って和さんと暮らしなよ。私はここで一人で暮らすから」

そんなこと出来ないのは分かっている。ここには作業場もあり、

古い一軒家に私が一人で住めるはずなんてないのだ。

私は無茶苦茶なことを言いながら、無茶苦茶に泣いた。

そんな私を、兄ちゃんは困った顔でただ見ているだけだった。

いつものことだが、無茶苦茶に泣くとすっかり忘れてしまう私は、翌日には残ったカレーを食べて大学の進路指導の相談に行く。そのまた翌日も行くが、私が希望する仕事はなかなか見つからない。

周りの友達は手当たり次第に企業を訪問してはリクルートスーツに汗を滲み込ませていたが、私はなんとしても、楽しいと思える仕事を探したかった。

友達は、「そんなこと言っていられないよ」と、私の意見を笑っていたが、兄ちゃんや和さんを見ると、どうしても負けたくなかったのだ。

結局、私の一人暮らし計画はなかったことのように時間は過ぎ、ついに大学四年になってしまった。

和さんは、ときどき円ちゃんを連れて家に遊びに来ては、美味しい料理を作ってくれた。最初は自分の居場所がなくなるような不安があったが、円ちゃんの嬉しそうな顔を見ていたら、そんな自分が恥かしくなった。

まるで、赤ちゃんにお母さんをとられると心配する姉のようだ。

和さんは、コーヒーを飲みながら、よく私の相談に乗ってくれた。

「私は萌ちゃんの歳にはもう円がいたから、何になりたいなんて考える余裕なんてなかったけど、考える余裕があるのも大変だよね」

私と九歳しか違わないのに、和さんの言葉は素直に私の耳から心に伝わった。もちろん「そうかな」と思うときもあって、反発もする気持ちにもなるけど、それでも、真剣に私のことを考えてくれている人の言葉は、自然と心に残るものだ。

もしも、私に母親がいたが、きつと喧嘩して、やっぱり泣いて、それでもお母さんに言われたことは忘れないんだと思う。

そんな忘れない言葉が、私の隣でほうじ茶を飲む円ちゃんにはいっぱいあって、私の引出には空っぽなんだと思うと、円ちゃんの心

の中から少し分けて欲しいと思ってしまう。

インターネットやリクルート誌を眺めているうちに時間はどんどん過ぎて行く。そして、気がついたら何処にも面接に行かないまま私は遂に大学を卒業してしまった。

兄ちゃんが行かせてくれた大学で、私は何を学んだんだろう。

卒業式の帰りに和さんの花屋によって、そんなことを言うと、和さんは私の卒業証書を幸せそうな顔で、隣にいた円ちゃんにも見せた。

「このペラペラの紙をもらうだけで、兄ちゃんに、ずいぶんお金を使わせちゃったな」

私は「なんて書いてあるの」と尋ねる円ちゃんの髪に飾ったりボンを触りながら呟いた。

そのリボンは、花束に使うためのリボンで、和さんは、よくそのリボンを使って円ちゃんと遊んでいた。

髪を飾ったり、動物を作ったり、本当に和さんは器用な人だった。「このペラペラの紙を、私も円にプレゼントしたいな。円にとってなんの価値もなくてもね。」

だから、卒業証書を持って嬉しそうに帰ってあげてね。きっと待ってるから」

和さんの言葉に押し出されて、私は家までの道で笑顔の練習をした。このペラペラの紙を待っていてくれる兄ちゃんに、どんな顔でお礼を言おう。そんなことを考えながら。

家に着いた私を、兄ちゃんは作業場で仕事をしながら待っていてくれた。

「卒業おめでとう」

兄ちゃんは、やっぱりポケットに手を入れて下を向いたまま早口でお祝いの言葉をいい、私は、そんな兄ちゃんの顔を見たら、涙が零れて、「ごめんね」と思ってもいかなかった言葉が口から飛び出した。

「なんだ、卒業出来なかったのか」

私の「ごめんね」を勘違いした兄ちゃんは、びっくりして私の肩を掴んだ。

「うっん、違うよ。せっかく兄ちゃんが大学に行かせてくれたのに、全然勉強もしなかったし、就職も出来なかった。ごめんね」

私は卒業証書を兄ちゃんに渡すと、そのまま兄ちゃんの胸で泣いた。

「楽しいこともあったか、大学は」

兄ちゃんは遠慮がちに私の背中を叩きながら、そんなことを聞いたと思う。

「友達も出来たし、楽しかったよ」

本当にそう思っている。勉強はしなかったが、大学で知り合った友達は、とてもいい人ばかりで、友達の家でお酒を飲んで話したり、みんなでドライブにも行った。

恋人は出来なかつたけど、合コンも楽しかった。

楽しくて笑っているときおり、兄ちゃんのことを思い出して悲しくもなったりした。

「だったら、良かったじゃないか。楽しかったんだろう」

兄ちゃんは、まだ泣いている私から離れると、改めて卒業証書を見つめ、「良かったな」と上を向いて言ってくれた。

あの時、兄ちゃんが上を向いていたのは涙が零れないようにだと思っていたけど、もしかしたら、天国のお父さんやお母さん、そして兄ちゃんのお母さんに報告していたのかもしれない。

大学を卒業した私は、居酒屋でバイトを始めた。

兄ちゃんは予想通り大反対だった。

和さんも花屋で働くことを勧めてくれたが、二人とまったく違うことをしたいと思った。

夕方の四時から深夜の二時まで、私はクタクタになって働いた。居酒屋で働くこうと思ったのは、人見知りな私への挑戦でもあり、クタクタに働くことへの憧れでもあった。

でも、そんな小娘の憧れで務まるほど、仕事は甘くない。

お客に文句を言われ、先輩に怒られ、店長を困らせる毎日は、本当に死にたくなるほど大変だった。

休みの日に、兄ちゃんにそんな泣き言いうと、兄ちゃんは、「楽しくないのか」と、おかしい聞き方をする。

それは、和さんと出会ってからの兄ちゃんの口癖だ。

和さんに出会うまでの兄ちゃんは、きっと楽しいとか、楽しくないとか考えたこともなくて、奥歯を噛み締めて生きてきたんだと思う。それが、生きることなのだとも無意識に信じていた。

不良だったときも、兄ちゃんは決して楽しそうじゃなかった。

恵さんと、悲しい恋をしていたときの兄ちゃんは、本当に生きてるのが辛そうだった。

「兄ちゃんは、仕事楽しいの」

寒い冬も、暑い夏も外で仕事をして、ろくに休みもない兄ちゃんに反対に聞いてみた。

「そうだな、嫌いじゃないな。俺は頭も悪いから、身体を使っている方がいいんだ」

兄ちゃんは真剣に考えて、私にそう教えてくれた。

結局、私は居酒屋を半年で辞めてしまい、兄ちゃんに恥かしいと思ったが、兄ちゃんは「そっか」と叱ることも、慰めることもしなかった。

きつと、あの時「根性がない」とか、「向いてなかったんだよ」なんて言われていたら、私は何も仕事をしなかったと思う。

「そっか」としか言ってももらえなかったから、私は自分で考えるしかなかったんだ。一生懸命、楽しいことを探さなきゃならなかったんだと思う。

間抜けな私は、どうしたら自分が楽しいと思える仕事が見つかるのだろうと、街を歩いた。

街を歩いて働いている人の顔を観察した。きつと、楽しい仕事をしている人の顔は、そんな顔をしているに違いないと思ったのだ。

いろんな顔があった。怒ってる顔、笑ってる顔、泣きそうな顔、

困った顔。本当にいろんな顔があった。

その中で一番印象に残ったのは、【してない顔】だった。笑っても、怒っても、泣いてもいない、何もしてない顔。そして自分の顔を駅のトイレで確認した。

「大丈夫、まだ、してない顔じゃない」

鏡に向かって自分に言っていると、とにかく走りたくなってトイレから階段を駆け上がる途中で、私は転んだ。

足を挫いて家に帰った私を、免許をとった俊之くんが病院まで運んでくれた。

「折れてないといいですね。入院とかしたら大変ですよ」

十五歳で兄ちゃんの処に来た俊之くんも、二十歳になり、来年には結婚すると言うのだ。

自分だけがちつとも成長していないようで、足の痛みが増した気がした。

私の足は太いだけで、頑丈ではなく、靭帯が切れていた。入院まではいかなかったが、ギブスをして松葉杖をつくはめになった。

松葉杖をもって病院の待合室で、私は「いつたいなにしてるんだ」と自分に呆れてしまった。

そんな私に看護婦さんは「大丈夫ですよ。すぐに良くなって元気に走れますから」とか、「ギブスがとれたらリハビリよ」なんて励ましたり、怒ったりしながら、必死で病院の中を走り回っていた。

そんな看護婦さんの中でも、一番怖そうな中年の看護婦さんに、「楽しいですか」と恐る恐る聞いてみると、その人は「あなたもやってみる」と、今まで見たことのない笑顔で、私を誘ってくれたのだ。

「私でも出来ますか」

「それは、分からないわ。でも、やってみれば分かるは、楽しいか楽しくないか」

その笑顔に私は「はい」と答えていた。

[6]

[6]

「看護師になろうと思うんだ」

私はギブスがとれた日に兄ちゃんに宣言した。兄ちゃんは予想以上に私の宣言を喜んでくれて、すぐに「どうすればいいんだ」と、何も調べていない私にいろいろと尋ねる。

「私も分かんないから、明日、病院に行つて聞いてみるよ」

インターネットでも調べることが出来たんだろうけど、私は、あの看護婦さんに聞いたかった。私の気持ちを聞いて欲しかった。

翌日、リハビリを終えた私は、待合室で忙しそうなの看護婦さんを見つければ、「私も看護師になりたんです」と、早口で言った。

看護婦さんは貴重な休憩時間に私にいろんな話をしてくれた。勤務時間の不規則なことや、神経をすり減らす薬のこと。

そして、最後に「本当にやる気があるなら、看護助手から始めなさい」と教えてくれた。

その話を兄ちゃんにすると、ちょっと顔を曇らせて「それでいいのか」と不満そうだった。

兄ちゃんは、私を看護学校に入れるつもりでお金のことまで考えていたようだ。

でも、私は今度は自分の力だけで看護師になれる道が見つかったことがとても嬉しかった。

春から看護助手として働き始めた私の毎日は、目が回るほど忙しいとはこのことだと思っただけで充実していた。もちろん、嫌なことや辛いことは居酒屋の時と同じくらいあるのだが、居酒屋の時と違うのは、看護師になるといふ夢があることだった。

挫けそうなほど、看護師という仕事は大変で、「本当に出来るかな」と毎日のように自分に問いかける。でも、夢があるだけで幸せだと

思える。それが、楽しいのだ。

そんな忙しい日々は、あつという間に過ぎていき、まだまだ仕事には慣れないけど、冬の初めに私は恋をした。

恋にうつつを抜かしてられるほど、私に余裕などないはずなのに、私は人を好きになっってしまう。

その人は私と同じ時期に入って来たレントゲン技師で、いくつもの病院を転々とするタイプの人だった。

「嫌なところで我慢して働くこともないしね」

二十九歳のその人は、当たり前のようにそう言っでは、コーヒーを飲んで笑っていた。

「山内さんは、資格があるから」

私は、そんな風に言っていたが、簡単に職場を変える山内さんを内心軽蔑していたはずなのだ。

それが、急に好きだと思ってしまったのは、医療行為も出来ない看護助手から、早く看護師にならなければと焦っているときだった。

休憩室でコーヒーを飲んでいる山内さんに、

「来年には准看護師になるのに、定時制二年行くつもりなんですけど、こんなんじゃ、出来るかどうか不安です。やっぱり資格は必要だし」そんな弱音を吐いた。

すると、山内さんは「看護助手じゃだめなの」と、今までだれも言わなかった疑問を私に向けた。

「俺はレントゲンの仕事が好きだから資格をとったけど、看護助手の仕事が楽しければ、それでいいんじゃない。」

看護助手が看護師になれない人の仕事ってわけじゃないでしょう。俺は患者さんが喜ぶ顔が生き甲斐な訳じゃなくて、いいレントゲン写真をとるのが好きなんだ。

俺の写真で病気が見つかるか見つからないかが決まると思うと、緊張もするけど、楽しいんだよ」

山内さんの言っていることは、不謹慎な気もしないでもなかったけど、なんだかとても気持ちが悪くなった。

そう思つて山内さんの話を聞いてみると、兄ちゃんとは違つて暖かさが山内さんにはあるような気がした。

例えるなら、兄ちゃんの心の中が燃える暖炉なら、山内さんの心の中は足湯のような暖かさだ。

最初のデートに誘つたのは私だった。デート自体経験が少ない上に、自分から誘うのなんて初めてだった。

二十四歳の女性がデートに誘うなら、いったいどこがいいのだろう。本屋に行き、インターネットで検索した結果、私は思い切つて洒落たフレンチレストランに山内さんを誘つた。

「友達がとても美味しいって言つから、一度行つてみたいんですよ。良かったら一緒に行きませんか」

もちろん洒落たフレンチに行く友人などいない。そんな私の努力を山内さんはあっさりと断つた。

「似合わないだろう、フレンチなんて。だったら、ラーメンが美味しい居酒屋に行こうよ」

そして、私と山内さんは居酒屋で、のラーメンを食べて、ホテルに入った。

居酒屋でラーメンを食べるのも初めてだったが、ホテルに入るのも初めてで、男性に抱かれるのも初めてという、初物づくしの夜に私は、やつぱり泣いた。

二十四歳の女に泣かれた山内さんは、困り果てて何も言えなくなつていた。

それから、私は今まで以上に病院に行くのが楽しくて、楽しくて浮かれまくつた。いい加減で適当だが、山内さんは優しくしてくれた。暇さえあれば山内さんとホテルに行き、いろんな話をした。仕事の話や子供の頃の話し、そして、看護師の夢。

こんなに人に自分のことを話したのは初めてだった。

でも、愉快なことは続かない。

半年が過ぎた春に、山内さんは病院を辞めてしまった。

ホテルの天井を見ながら、私に相談もしないで病院を辞めること

にした山内さんが、急に遠い人を感じた。

「何があつたの」

私は責める口調にならないように出来るだけ落ち着いて尋ねた。

「なんか違うんだよね。あの病院」

山内さんは、それだけ答えると、また私の上に重なって大きくない胸に顔を埋めた。

一カ月後に山内さんは誰にも声をかけて貰えずに病院を去り、それから、私との連絡も少なくなった。

私は山内さんからのメールばかりが気になって、仕事も疎かになり、私を病院に入れてくれた看護婦さんからも、何度も叱られ、病院を辞めようと悩んだ。

そんな私の様子に兄ちゃんは、心配そうな顔で「なんかあつたか」と何回も聞いてきたが、山内さんのことは、兄ちゃんに言いたくなくなつた。

きっと、兄ちゃんは、山内さんを悪く言うと思つていたから。

「兄ちゃん、兄ちゃんは、和さんのどこが好き」

私はビールを飲みながらニュースを見ていた兄ちゃんに聞いてみた。

「どこが好きななんて忘れたな」

兄ちゃんはテレビから眼を逸らさずに、照れた。

「和さんは、美人だし性格もいいし、頑張り屋だし、料理も上手だから、好きなとこだらけだね」

私は寝転びながら、山内さんのことを考えた。

「別に、そんなんで好きになつたんじゃないと思う。前に好きになつた人は我侭で自分勝手に子供っぽくて、頼りない人だつたけど、たまらなく好きだつたんだから」

兄ちゃんの言つた前に好きだつた人が恵さんなのはすぐに分かつた。

「そんな人を好きになつて後悔しなかつた」

「後悔してもしかたないだろう、好きになつたもんを。それに、あ

の人がいたから、和をもつと愛せるようになったと思ってんだ。
人を愛するのも、経験がないと上手く愛せないんじゃないかなっ
てさ」

兄ちゃんは顔を真っ赤にしながらも、私のために一生懸命話をし
てくれた。

「そうなんだ」

「そうなんだと思う。だから、誰を好きになってもいいんじゃないか
ねえか」

恋愛経験も少ないくせに、兄ちゃんは偉そうに言うものだから、
私まで恥かしくなってしまった。

〔7〕

〔7〕

季節はあつという間に、春から夏になり、秋が終つて冬がまた来た。そして、一年は繰り返し、また春になる。

病院を辞めた山内さんからは、夏頃から連絡をしなくなり「さよなら」も言わないままに終ってしまった。

特に恋に懲りた訳ではなかったが、私はなんとなく誰も好きになることもなく、看護助手の仕事と四月から入学することになった定時制の看護学校のことと気忙しく毎日を過ごしていた。

兄ちゃんと和さんは、いつ結婚するのだろうと周りは気にしていたが、本人たちは「しばらくは、円ちゃんと二人の暮らしがいいのさ」と急ぐ気配も焦る気配もない。

でも、兄ちゃんが円ちゃんの父親になるのを嫌がっているのでも心配してるのでもなく、和さんがしたいようにさせているようだった。

子供がいて年上の和さんは、ときどき兄ちゃんに「私じゃなくても」と、本心から言っていた。

最初は真剣に怒って「そんなこと、俺が決めるんだ」って言うていたが、最後は笑って聞き流していた。

きっと、時間はかかってても二人はいつか自然に暮らし始めるのだらうと、私はほんやりと予感していた。

しかし、感の悪い私の予感は、簡単には当たらない。

私は小児病棟から精神内科に異動になり、カルテを運んだりする仕事は変らなかつたが、患者さんの対応には戸惑うことばかりだった。

どちらから言えば、楽天的な私は、こんなにも心を病んだ人が居ることにビックリしたり、色んな症状や病名があることにも驚いた。

病院は薬物療法から、カウンセリングを主体にする治療に変わるとして、医師も今までとは違う対応に戸惑い、看護師や私のような看護助手に苛立ちをぶつける人もいた。

最初に配属されたのが小児科だった私は、将来も小児科の看護師になりたいと思っていたので、症状の見えない患者さんと、苛立つ医師に、めげていた。

せっかく入った学校でも、昼間のことが頭から離れず、本当に辞めてしまおうかと悩んだ。

そのことを思い切って兄ちゃんに相談したのは、夏の終わりだった。

私の作った夕食を食べ終わり、興味なさそうにテレビを見ていた兄ちゃんに言った。

「全然、勉強についていけないんだよね。仕事も難しくなったしさ」

どう考えても面白くないお笑い番組を見ていた兄ちゃんは、タバコに火をつけて、

「難しい仕事だもんな。俺は勉強が嫌いだから、学校なんて行く気にならねえよ」

と、珍しく私の相談を上の方で答えた。

「私だって勉強は嫌いだな。やっぱり辞めようかな」

本当に私には根性が無い。

そんな根性のない私が、どうにか生きてこれたのは、全部兄ちゃんのお陰だ。

母親が亡くなり、寂しくて仕方がない夜も、兄ちゃんは部屋の外から話をしてくれた。昆虫の話や犬の話し、それにかなり適当な昔話も聞かせてくれた。

私が「こっちでお話して」と部屋の中から呼んでも、兄ちゃんは絶対に私の部屋には入らず、廊下から話をしてくれた。

お父さんが死んでも、生活のことを心配しないですんだのも、兄ちゃんが家にいたからだ。

面倒なことは全部兄ちゃんがしてくれて、私はお父さんが居た頃

と変わらず。ご飯だけ作ってあればよかった。

もしも、十七歳の私が一人で生きると言われたら、きっと泣いてばかりで、死んでしまったのではないかとさえ思っている。

「最近、和さん来ないね」

私は話題を変えた。和さんだったら上手に作れる肉ジャガが、私を作ると、何か美味しくない。

「来たくないみたいだ」

私は自分のことばかりで、兄ちゃんの変化にまったく気づかなかった。

「どうしてよ」

私はテレビのスイッチを切って、兄ちゃんを問い詰めた。私は、いつだって兄ちゃんを頼っている。どうにもならないことでも、気がつくとき兄ちゃんに話をしていた。

それなのに、兄ちゃんは和さんのことさえ、何も話してくれないなんて、酷すぎる。

急にテレビを切られた兄ちゃんは、それでも黒くなった画面から目を離そうとはせず、「わかんねえんだよ」と、頭を掻いた。

「分かんないって、ちゃんと聞いたの」

兄ちゃんは何も聞かない人だ。私が高校の時に先輩に苛められて部活を辞めた時も「そっか」としか言わなかった。

就職が決まらずに焦って「私なんて何も出来ないんだよ」と怒鳴ってしまった時も、ただ笑っているだけだった。

それが兄ちゃんの優しさなのは分かっている。でも、和さんのことは別だと思う。

私なんかがした恋とは比べものにならないほど、兄ちゃんは和さんを愛していたはずだ。だったら、何も聞かないで笑っているなんて、そんな優しさなんていらさない。

「仕方ないだろう。嫌われたんだから」

兄ちゃんは、自分がなんで嫌われたのか、他に誰か好きになったのかさえも、知ろうとしなかった。知っても仕方がないことだから

知らないで、兄ちゃんの気が済んでも、私の納得出来ない。

私は裏切られた気持ちでいっぱいになり、兄ちゃんに箸を投げつけていた。

「危ないだろう」

兄ちゃんは目を赤くしても笑っていた。

翌日、仕事が終わった私は花屋さんを訪ねたが、もう店は閉まっていた。

店の前に立ち、和さんの携帯に電話をしたが呼出がなり留守番電話になってしまう。

何度か電話してみたが、やっぱり電話に和さんは出なかった。

それから、毎日、仕事帰りに花屋さんに寄ったが、和さんに会えたのは、秋も終わり冬になっていた。

店先の花を片付けている和さんの顔色は、ちょっとした間に青白く不健康そうになっていた。

「こんにちは」

あんなに文句を言ってやろうと思っていた私は、和さんの顔を見た途端に、怒りよりも不安になってしまった。

「あ、萌ちゃん。元気だった」

私の健康を気遣う必要なんてないぐらい、和さんは痩せていた。

「和さん、どこが悪いんですか」

力なく笑う和さんに、私は笑顔さえ忘れてしまった。

「大丈夫、ちよつとここじゃ」

小声になった和さんは、私を駅前のコーヒーショップで待っているように言うと、店の片付けを続けた。

コーヒーショップで待っていると、和さんは、キャップを目深に被り、辺りを気にするように入って来た。

「ごめんね、店も見張られているし、尾行もされているから」

思いもよらない告白に、私は混乱して店の中を見渡したが、風体の悪い人は見当たらず、買い物帰りの主婦と仕事帰りのサラリーマンが数人いるだけだった。

「なんで、そんなことになっただんですか」

和さんに釣られ、私も小声で尋ねた。

「分からないの。前の旦那から電話があっただけから、変なことが続いて、調べてみたの」

和さんの目は完全に怯えていた。

和さんの前のご主人は、円ちゃんの誕生日に何かプレゼントしたいと言って電話をしてきたそうだった。

今までは定職にもつかずバイトや派遣をされていて余裕がなかったが、やっと仕事が落ち着いたから、今までの分まで何かしたいという申し出だった。

「せっかく円も忘れてるのに、今更ね」

和さんは、その申出を「気持ちだけ頂くは」と言って断ったそうだった。すると、元旦那さんは、和さんとの復縁まで匂わすようなことを言い、勿論、和さんは笑って断った。

すると、翌日にお店のホームページに、いやらしい書き込みがあり、クリックするとエロサイトに繋がるように仕組まれていたそうだった。

最初は、ただの悪戯か、サイト業者の宣伝だと思ったのだが、その後すぐに元旦那からメールが来て「和が幸せなら邪魔はしないよ」と意味ありげに言ってきたそうだった。

それから、元旦那からはメールも電話もないのだが、ホームページへの書き込みは無くならず、店を出ると、三人組みの男に後をつけられたりするようになったらしい。

そして、ふと見た別の花屋のホームページに自分の悪口が書かれているのを発見してしまった。

もしも、円ちゃんに危害でも及んだらと心配になった和さんは、

思い切って元旦那に、そのことを相談したそうだった。

「最初は彼を疑っていたから」

和さんはコーヒーカップをいじりながら、一口も飲もうとしない。しかし、元旦那は和さんのことを心配するどころか、「そんな訳

ないだろう」と笑うばかりだった。

私は和さんの話を鳥肌を立てながら聞き終わると、問い詰めるように尋ねた。

「なんで、兄ちゃんに相談しなかったの。兄ちゃんを疑ったの」

和さんは私の問いに大きく首を振り、

「剛さんを疑ったことなんかないわ。ただ、私の問題に剛さんを巻き込みたくなかったの」

そう言った言葉も小声だった。

家に帰った私は、迷った拳句に兄ちゃんにそのことを伝えた。

「いったい何が起こったんだ。ちゃんと説明しろよ」

兄ちゃんは私の肩を掴んで問い詰めるが、私だって何がなんだか分からない。

「ちよつと、行ってくる」

兄ちゃんは、怒りながら家を出て行った。

その日、兄ちゃんの帰りを眠らずに待っていたが、兄ちゃんは帰ってこなかった。もしかしたら、このまま帰って来ないのじゃないかと心配になり、何度も携帯を手にしたが、返って来なくても、兄ちゃんが幸せになるなら仕方ないんだと、自分に言い聞かせて朝を迎えた。

いつもと同じように兄ちゃんの朝ご飯とお弁当を準備していると、兄ちゃんが帰って来た。

ポケットに手を入れて丸めた背中が、疲れきっていた。

「どうだった」

私はお味噌汁をテーブルに乗せると、座り込む兄ちゃんに尋ねた。「駄目だ。なんで、あんなにポロポロになるまで何も言ってくれなかつたんだ」

悔しそうに悲しそうに背中を震わす兄ちゃんを見たのは初めてだった。どんなに辛いことがあっても、兄ちゃんは平気な顔をしていた。

涙を流しても決して下を向いたりしなかった。でも、その時だけ

は、下を向いたまま兄ちゃんは涙を流した。

〔8〕

〔8〕

和さんが何者かに恨みをかい、執拗な嫌がらせを受けるなんて信じられない私は、悪口を言う花屋のホームページや、和さんの店のホームページを丹念に読んで見た。

そして、休みの日には教科書を持って和さんの店の見える喫茶店で様子を伺ったりしたが、どうしても、和さんが言うようなことが起こっているとは思えなかった。

店のホームページにエッチなサイトから書き込みがあるのも、珍しいことではなく、単に客を呼び込むための悪質な宣伝文句にしか読めず、それが、和さんへの悪口には思えなかった。悪口を書いているという花屋のホームページは、いたって普通で、和さんに関する内容など見当たらない。

店の前を通る人も、花を覗いたりはしていたが、不審な人物と思える人などいなかった。

兄も私と同じように和さんの言ったことを調べては、首を傾げるばかりだ。

そして、私はある疑問に辿り着いた。

【総合失調症】。

私が勤める精神内科には、多くの患者がその病気で訪れる。心の病というと鬱病が有名だが、実は総合失調症で苦しむ人も少なくない。その症状は様々で、和さんの場合は【被害妄想】に似た症状に思えた。

「兄ちゃん、一度和さんを病院に連れてきた方がいいよ」

和さんのことで、兄ちゃんまで痩せてきたが、私は逆に太った。

「うん、言ってみるよ」

私の説明に納得した兄ちゃんは、溜息をつきながらそう言ったが、

やはり精神内科に和さんを連れて行くのは気が進まないようだった。まだまだ、精神内科に対する偏見や誤解は多く、行くことを拒む人や家族は多い。私だって、病院で仕事をするまでは、抵抗があった。

兄ちゃんは和さんに「一度病院に行つて話を聞いて貰おう」と何度も説得したが、和さんは「本当に誰かに狙われているんだから、病院に行つても仕方ない」と言い張るばかりで、私の話も、兄ちゃんの話しも聞こうとしない。

確かに、円ちゃんの学校の話や、兄の仕事の話し、それに店の仕入れの話などをするときの和さんは以前と変らない気がする。

しかし、私が和さんの病気を確信したのは、夕食時に和さんが雑誌を持って飛び込んできた時だった。

「見て、ここに私のことが書いてあるの」

和さんが開いたページは、働く女性の性に関する記事だった。そこには、和さんに関連する内容などにもなく、ただ、談話として乗せていた匿名の女性が、和さんと同じ年というだけだ。

兄ちゃんは「お前のことなんか誰も気にしちゃいねえよ」と、その雑誌を床に叩きつけた。

兄ちゃんは悔しかったのだ。自分の話を聞いてくれない和さんに、悔しくて悔しくて仕方がなかったのだ。

でも、それが病気なのだから仕方がないのだが、兄ちゃんにはそんなことで納得出来るはずがない。

「和さん、和さんの言っていることが本当でも、和さんの心は凄く疲れてるから、一度、うちの病院に行こう。ねっ」

雑誌を拾いながら泣きじゃくる和さんの姿は、私が知っている元気で明るい和さんとは別人にさえ思えた。

結局、和さんは病院に来ることもなく、私や兄ちゃんを避けるようになったが、私にはそれ以上何も出来なかった。ただ、避けられても円ちゃんのことを心配し続ける兄ちゃんの気持ちが悪かった。和さんが倒れたのを知らせて来たのは、大工の川田さんだった。

川田さんは大学の建築科を中退して、鵜飼さんの会社に入った。直接本人から聞いたわけではなかったが、お父さんが長く入院して、学費を払えなくなったらしい。

兄ちゃんとは年齢も同じだったので、ときおり仕事が終わると二人で飲みに行っていた。

朝食を食べているところに現れた川田さんは、兄ちゃんを責めるように言った。

「和さんが入院したらしいぞ、知ってるのか」

もちろん、そんなことなど知らない兄ちゃんは、箸を持ったまま川田さんに聞き返した。

「本当か。いつだ」

「一昨日、店で倒れて救急車で運ばれたらしい。救急車を呼んでくれたうどん屋の婆さんは、『すぐく瘦せたらから、危ないと思ったんだよ』って言うてたぞ」

和さんが倒れるまで何もしなかった兄ちゃんを、川田さんは何も知らずに責めた。川田さんも、和さんのことが好きなのは、女の私にはなんとなく分かってしまった。

兄ちゃんは川田さんの軽トラックに乗ると、そのまま病院に行ってしまう。私は心配しながらも自分が勤める病院に向かった。

私は精神内科の看護助手でありながら、憔悴して倒れることまで予想しなかった自分を責めた。誰にも理解されず、部屋の中で見えない影に怯える和さんのことを思うと、申し訳なくて涙が止まらなかつた。

兄ちゃんも私も、和さんのことが大好きだったのに、何もするところが出来ず、ただ、和さんが元の和さんになるのを待ってるばかりだった。

和さんが入院したのは精神内科のない病院で、点滴と安静をさせただけで退院させてしまった。

しかし、退院の時に来た和さんのご両親は、和さんと円ちゃんのことを心配して、九州の故郷に連れて帰ることにしたのだ。

兄ちゃんは、ご両親に何度も「すいません」と頭を下げたが、ご両親は兄ちゃんに優しい言葉を返してはくれなかった。

和さんが九州に帰る前日に、私はお好み焼きを食べながら兄ちゃんと話をした。

「止めなくていいの」

病気になってしまった和さんにとって、何が一番良い方法なのかは分からない。

「あっちは、海がきれいなんだってな。和が良く言ってたよ。いつか、俺に本当の海を見せてくれるってさ。」

この辺の海は本物じゃないらしいぜ。きっと、本物の海を見たら、元気になるよな。円ちゃんも、真っ黒に日焼けしてさ」

兄ちゃんは青海苔を歯に付けたまま、笑ったのは、昨日も一昨日も私に隠れて泣いたからだと思う。

泣いて、泣いて、涙がなくなるまで泣いたのだと思う。

兄ちゃんのことだから、何も気づかず、何も出来なかった自分を責めて自分の拳で自分の頬を殴ったりもしたと思う。

「安心できる場所で生活するのも、いい治療なんだよ。きっと、治ったら、帰ってくるよ」

私も青海苔のついた歯を見せて笑った。

〔9〕

〔9〕

和さんが九州に帰ってから、ときどき、ボンヤリと携帯を眺めていることはあったが、兄ちゃんは変わらず仕事に励んだ。

そして、私は二年間の専門学校をなんとか卒業して、准看護婦の資格をとることが出来た。

准看護師としても二年が過ぎ、二十八歳になった私はついに正看護師の資格をとろうと決意し専門学校に通うことになった。

精神内科から、外科に移り救急の呼び出しも増えた私を心配した兄ちゃんは、「正看護師になるなら、病院を一度辞めて昼間に通え」と強行に主張したが、私は准看護師の時と同じように働きながら勉強することに決めていた。

昔の私なら、兄ちゃんが言うように楽な方法を、兄ちゃんを頼って選んだと思う。

変わったのは何か劇的なことがあったからではなく、ただ、普通に他の人と同じように働いているだけで、少し大人になれたのだと思う。私より苦勞して頑張っている人は、いくらでもいる。私は、ただ、普通にみんなと働いているだけなのだ。きつと、そんな当たり前のことでも、私は成長出来た。

兄ちゃんはきつと、私よりも何倍も何倍も成長して、今では水道施設工事組合の理事まで遣らされるようになった。

人前に立つのが苦手な兄ちゃんは、理事長から話が来たときは即座に断ったのだが、ついには、鵜飼さんまで出てきて説得されたものだから、本当に嫌々引き受けた。

十歳のときから兄ちゃんを見ている私は、すっかり立派になった三十二歳の兄ちゃんを、みんなに見せたかった。

色々なことがあって、今でも兄ちゃんは大変だけど、この頃の兄ち

やんは、とても輝いていた。

学歴やお金のことを気にする人にはなんか分からなくても、兄ちゃんは、とてもカッコいいのだ。だから、いつまでも和さんの思い出を取り出しては、思い出に恋をしていないで、新しい恋をして欲しい。

兄ちゃんはメールアドレスさえ変えてしまった和さんが送ってくれたメールを、今でも大切に保存して夜中に読んでいるのを、私は知っていた。

笑ったり、泣きべそをかいたりしながらビールを飲む兄ちゃんの顔を見てると、イライラして背中を蹴りたくなる。

和さんが忘れられないなら、九州まで探しに行けばいいんだ。九州のどこか分からなければ、端から端まで探せばいいんだ。

それが出来ないなら、メールを全部消して忘れた方がいい。

兄ちゃんは、病気に気づいてあげられなかったことを後悔していた。そして、何も出来ない自分を責めていた。

そんな兄ちゃんを見てみると、恋なんて後始末がやっかないなご馳走のような気がしてならない。

美味しければ美味しいほど、食べ終わった食器や、使ったフライパンを片付けるのは大変なのだ。

兄ちゃんの恋は、いつだってお鍋についた焦げをとるのが大変で、洗う手さえも傷だらけになってしまう。

面倒臭がりの私には、とうてい出来ることじゃない。

だから、結婚なんてしないで一生兄ちゃんと暮らすのだろうと勝手に決めていた。

そんな私が思いもよらず恋をしたのは、看護学校の二年の時だった。大雪で仕事が休みになってしまった兄ちゃんが、川田さんを連れて来たのだ。

「お誕生日おめでとう」

作業着を雪だらけにした川田さんは、大事そうにお腹にしまっていた小さな包みを取り出すと、恥かしそうに私の目の前に差し出し

た。

「どうしたんですか」

昔から知っている川田さんからの初めての誕生日プレゼントに、私は驚いてしまった。二十五歳のときも、二十九歳のときも何もくねなかつたのに、三十歳の今年だけくれたのだ。

「まあ、たいしたもんじゃないから」

川田さんは雪で凍えた手をストーブに翳すと、照れ臭そうに私の顔も兄ちゃんの顔も見ない。

川田さんと兄ちゃんは、本当に良く似ている。照れ屋で仕事熱心で、お酒が大好き。

そんな二人がときおり家でお酒を飲んでいると、別人のようによく喋った。そのほとんどが仕事のことだが、ときおり女性の話もしていた。

川田さんは背の高い美人が好きで、兄ちゃんは気の強い女性が好きだと言っては、大笑いしていた。

背も大きくなく、ちよつと太めでノンビリタイプの私は、二人の好みのどちらにも当てはまらない。だから、二人が飲んで話しているのを聞いていると、少しだけ寂しい気持ちになり、お腹の肉を摘んだり、目に力をいれてみたりした。

プレゼントを渡しなれてないと見えて、川田さんはストーブの前から離れようとせず、ただ、「寒いね」とだけ言った。

そんな川田さんの背中を、拳で叩いた兄ちゃんは、

「川田がさ、お前に渡して欲しいって、大雪が降る中で俺に渡すんだぜ。こっちは現場の資材に必死でシートを被せているのにさ」

と面白そうに川田さんをからかう。

その姿が、和さんのことをからかわれていた兄ちゃんに似ていたから、昔のことを思い出して涙が出そうになった。

「どうしたんだよ」

川田さんから貰った包みを抱きしめて泣き出した私に、兄ちゃんも川田さんもビックリしてしまい、川田さんは「迷惑だった」と私

から包みを取り返そうとした。

オロオロする川田さんと兄ちゃんの優しさが、泣き虫な私をもっと泣かせ、わんわん泣きながら包みを力いっぱい抱きしめた。

川田さんがくれたのは、私の小指には似合いそうもない細いピンキーリングだった。本当は薬指にするつもりで買ったのかもしれないけれど、私の小指のサイズにぴったりだった。

「なんか、いいんじゃないか」

女性を褒める言葉など持ち合わせていない兄ちゃんは、それでも精一杯のお世辞で私と川田さんを励ました。

「どう？ 気に入らなければしなくていいよ」

小指にはめた指輪を眺める私に、川田さんは気を使って言ってくれたが、似合うか似合わないかは別として、小さなリボンの飾られた指輪を、私はとても好きになった。

「ありがとう。仕事にはしていけないけど、大切にします」

生まれて初めて貰った指輪。私が抱きかかえてクシャクシャになっってしまった包装紙に包まれた私の指輪。

指輪にもピアスにもネックレスにも興味がない私が、こんなにも喜ぶとは、自分でも呆れてしまう。

「そうだ、ケーキも買って来たから」

兄ちゃんは現場に行ったトラックの中に置いてあったケーキを取りに言った。

兄ちゃんは何かお祝いがあると、必ず駅前のケーキ屋さんで大きなデコレーションケーキを買ってくる。食べきれないほどのケーキは、あの時の同じイチゴのケーキに決まっていた。

和さんと円ちゃん、そして、私と兄ちゃんの四人で初めて食べたクリスマスケーキだ。

口いっぱいクリームのついたイチゴをほうばり、目を細めて喜ぶ円ちゃん的笑顔を、兄ちゃんも忘れることが出来ないのだと思う。だから、私の誕生日にも、入学祝にもイチゴのケーキを買ってくる。

誕生日のケーキを食べた日から、川田さんのことが気になり始めた私は、いままで、気にもしなかったことを、兄ちゃんに尋ねた。

夕食の茶碗を出しながら、食後のお茶を注ぎながら、テレビのチャンネルを変える時に、それとなく川田さんのことを尋ねるのだが、どう考えても、その聞き方は不自然だと思っただが、兄ちゃんは、そんなことを気にせず、丁寧に答えてくれた。

川田さんが生まれたのは、ここから二時間ほどの地方都市で、大きな企業とその下請けで働く人がほとんだった。

川田さんのご両親も、下請け企業でコツコツと働き川田さんと、五歳下の弟を育ててくれた。裕福ではなかったが、ご両親は大学に行きたいという川田さんを、喜んで送り出してくれたのだが、大学に入学するとすぐに、川田さんのお父さんは癌になり高額な治療の甲斐なく亡くなってしまった。

学費を払えないだけではなく、治療のために借りたお金を返すために川田さんは、大学を辞めて大工さんになったのだ。

そんな川田さんのことを、兄ちゃんは淡々と話してくれた。特に同情するでも、褒めるでもなく、あるがままに話してくれた。

「川田はさ、家を建てたくて建築科に行ってたから、大工になれたんだから、大学を出れなかったのは、そんなに後悔してないって言うてたよ。」

ただ、田舎で弟と住んでる母親が、帰るたびに「大学も出してやれなくて」って言うのを聞くのが辛いらしいぜ」

そんなことを兄ちゃんは教えてくれた。

でも、その時はまだ、川田さんが好きだとは自分では気づいていなかった。

大雪の誕生日以来、川田さんは前よりも兄ちゃんを飲み誘うことが増えて、私もときどき兄ちゃんのお供をした。

大学でも、あまりお酒が飲めなかった私は、きつとお酒が弱いのだろうと思っていたが、兄ちゃんや川田さんと飲むようになってから、案外、お酒が好きなことに気がついた。

ビールやチューハイは美味しいと思わないのに、日本酒と焼酎のお湯割りは美味しく飲める。美味し過ぎて、いつも兄ちゃんに迷惑をかけていた。

居酒屋のカウンターでは、いつも私を真中に座らせするの、話をするのは仕事のことばかりだ。あまり良く分からない話が目の前を飛び交うのも、気楽で落ち着けた。

そんな風にして三人で飲むようになってから、暫くしたクリスマスイブに夜勤中だった私に川田さんからメールが入った。

【メリークリスマス 俺、萌ちゃんのことを好きなんだ】

なんとなく感じてはいたが、あまりに真っ直ぐな告白に、ナースセンターの私は携帯を慌てて鞆の中に仕舞いなおしてしまった。

幸い、その日は急患もなく比較的穏やかな夜だったので、私はメールの文面を何度も頭の中で読み返し、なんて返信をしようか迷い続けた。

勤務が終わり、病院を出ても私はメールの返信が出来ずに家までの道を何度も携帯を開いては閉じた。

家に帰ると仕事に行く準備をしていた兄ちゃんが、いつもと変らぬ様子で「お帰り」と言ってくれたが、その日は「お帰り」さえ特別な言葉に聞こえてしまった。

今までの恋で、「好きだ」と告白されたことなんてなかった私には、本当に特別な日なのだ。

夜勤明けで眠たいはずなのに、私はベットに横にもならず携帯を睨んでいた。

なんて返信すれば？

迷いに迷って、何度も打ち直して送信したのは、「私も好きです」という、川田さんに負けないほどの直球だった。

それから、私たちは遠慮する兄ちゃんを誘って三人で飲んだり、カラオケに行ったりした。三人とも歌が苦手なのに、居酒屋の後にはカラオケに行く習慣が出来ていた、最初の歌はいつも私の【未来予想図】に決まっていた。

休みの日には二人でドライブをしたり映画も見に行った。そして、春には川田さんのお父さんのお墓の前で結婚することを報告した。私と川田さんの結婚を、兄ちゃんは心から喜んでくれた。

「おめでとう。お前が選んだ相手なら、誰だって反対しないけど、川田なら大賛成だ」

兄ちゃんはポケットに手を入れたまま、私と川田さんの報告に頷いていた。

〔10〕

結婚式は正看護師の試験が終ったあと、小さなレストランで親しい人だけで遣りたいと私は思っていた。

最初は、「試験に合格してから」と川田さんと決めていたが、兄ちゃんが、「不合格なら、今度は二人で頑張ればいいだろう」と川田さんを説得し、川田さんも、「そうだな、俺も協力したいしな」と、試験を受ける前から不合格が決まっているような言い方をしたのは気に食わなかったが（そんなに協力したいなら、させてあげるわよ）と意地悪な気持ちで了承した。

そうして、私の結婚式は看護学校を卒業した後の四月に決まった。周りの友達がそうしたように、私も小さく温かい結婚式を望んだのだが、兄ちゃんは「せめて式場でしろよ」と私ではなく川田さんを責めたものだから、川田さんは、私と兄ちゃんの板挟みにあい、本当に大変そうだった。

結婚式の話をするたびに、溜息をつく川田さんが可哀想になった私は、仕方なく小さな式場で、披露宴だけをすることにした。

特に信じている神様もない私は、角隠しもウエディングロードも興味はなかった。

試験勉強も大詰めのも二月には、式のことを全て川田さんと兄ちゃんに任せ、私は【絶対合格】の八チマキをしめて勉強に邁進するつもりだったが、八チマキをすると眠くなる体質だったようで、気がつくともノートに涎をたらして寝ていた。

試験の日も、空には厚い雲がかかり、大雪が降りそうだった。

「弁当を忘れるなよ」

兄ちゃんは、そう言って私を笑顔で送り出すと、自分も自動車に乗って仕事に向かった。

まったく兄ちゃんはいつまでも小学校の遠足のことを憶えている

ものだと感心した。

小学校五年の遠足で、トンマな私はお父さんが作ってくれたお弁当を玄関に忘れるという失態を演じた。

お弁当の時間になって、そのことに気がついた私は、仲の良かった麗菜ちゃんのお弁当を分けて貰ったのだが、小食な麗菜ちゃんのお弁当をつまむだけでは、お腹が満たされることはなく、なんともひもじい思いをしたものだ。

そして、ひもじさよりも、麗菜ちゃんのお母さんが作る色とりどりで可愛いお弁当が羨ましさで悲しさで、お腹は減っても、なんだか胸が苦しくなったのを憶えている。

父さんが一生懸命作ってくれるお弁当は美味しかったが、地味で大きなお弁当だった。

「どうだ、美味そうだろう」

父さんは出来上がったお弁当を、自慢げに兄ちゃんに見せて、兄ちゃんは「美味そうだね」とそんなお弁当さえ羨ましそうに笑っていた。

結局、私が忘れた弁当は冷蔵庫で冷たくなり、兄ちゃんの夜ご飯になった。

試験が終わり会場を出ると、大雪の中を川田さんが怖い顔をして待っていた。

試験の出来が悪かった私は、川田さんに恐る恐る近づくと、「ごめん」と頭を下げたのだが、川田さんは何も言わず、車まで私の手をひいて急ぎ足で歩いた。

他の受験生の手前、男性と手を繋いで歩くのは躊躇われたが、川田さんは、そんな私のことなど気にもとめず、ズンズンと降り積もった雪の中を早足で私を引っ張った。

車に乗ると、試験のことを報告しようとする私の言葉を遮り、前を向いたまま早口で兄ちゃんの事故のことを言い出した。

「剛が怪我をした。今からすぐに病院に行くから」
何を言っているのか直ぐには理解出来なかった私は、「えっ」と

小さく声を出すのが精一杯だった。

「現場に置いてあった資材が雪に濡れないようにシートを被せていたら、ガス屋忘れたパイプが頭に落ちたんだ」

川田さんは悔しそうに何度も「くそっ」と舌打ちをして、何度もハンドルを叩いた。

病院に着くと、もう兄ちゃんは息を引き取っていた。包帯をグルグル巻きにされた兄ちゃんは、静かに目を閉じて何も言ってくれない。

試験の出来が悪かったことも、途中でお腹が痛くなったことも、前の席で試験を受けていたのが年配の女性だったことも、兄ちゃんは聞いてくれない。

話したいことが、次から次へと出てくるのに、兄ちゃんの耳には、もう私の声は聞こえないのだ。

母が亡くなったときは、私はまだ子供だった。お父さんの死は、覚悟しながら迎えた。

でも、兄ちゃんが死ぬことなんて考えたこともなかった。

三十五歳。

私は泣くこともなく、冷や汗が流れ全身の血が下がるのを感じながら、その場に倒れた。

その日から、私の頭の中は結婚どころではなく、試験のことさえ忘れていた。気を抜くと、いつも目の前には兄ちゃんの姿があり、自然と涙が零れてた。

結婚を延期しようと川田さんは言ってくれたが、鵜飼さんの言葉で、私は式を早めることにした。

「人間はな、死んでから四十九日間はこの世に魂があるんだぜ。今までお世話になった人たちに、お別れを告げるために、仏さんがくれたのが四十九に間だ。」

きつと、剛は萌ちゃんの花嫁姿を見ないと、成仏できねえんじゃないかねえかな」

結婚式の前の私と川田さん、そして鵜飼さんで兄ちゃんのお骨の

前で食事をした。

「最初に剛にお祝いしないとな」

鵜飼さんは、誰も座っていない席に置かれたコップにビールを注ぎ、「いよいよ明日だぜ」と兄ちゃんのコップに自分のコップを合わせた。

「剛、萌ちゃんと結婚して、お前が俺の兄ちゃんになるんだな」

川田さんは口元に笑みを浮かべ「おにいさん」と兄ちゃんをからかった。

「兄ちゃん、笑ってるかな」

私は川田さんの「おにいさん」にきつと、何も答えないだろう兄ちゃんのことを考えた。

母親を亡くし、父親の手からお父さんの手に渡された十歳の兄ちゃん。

それから二十五年、兄ちゃんが幸せだと思つたときはあつたのだろうか。

「剛はさ、本当に萌の父ちゃんが好きだったんだぜ。ヤツが死んでから、本当のオヤジが現れてさ、剛と一緒に住まないかって言つたんだよ」

鵜飼さんの話は始めて聞いた。

「親父さんも、生活が安定して余裕が来ると、息子のことが気になつたんだろうな。まあ、あいつにも親の心があつたってことだ。

でも、剛はきつぱりと断つたよ。今更、世話にはなりたくないとな。

その話を聞いた俺は、なんだか、剛もヤツの切なくなつたよ。『ちよつとは、甘えてやれよ』なんて説教しちまった。

剛は「ガキじゃあるまいし」って怒つてたけど、考えたんだろうな、萌ちゃんの大学に行く金を銀行から借りるのに、ヤツに保証人を頼んだのさ。最初は俺に頼んできて、俺も快く引き受けたんだけどな」

私がなんとなく通つていた大学には、そんなことがあつたのだと

思うと、なんでもっとあの頃を大切にしなかったのだろうと、悔い
が大きくなった。

「ええ、その話をしてる剛は、ちょっと照れ臭そうでした」

川田さんも知っていた。

「剛が保証人を頼みに言ったら、親父さんは二つ返事で了承したど
ころか、その金は全部自分が出したいって申し出てくれたらしいで
すよ。『くそつたれ親父と思ってたけどな』剛はそんな風に言っ
て嬉しそうでした」

剛さんのお葬式は、そのお父さんが、私に喪主をするように頼ん
できた。

「いまさら父親面は出来ません。萌ちゃんには申し訳ないけど、き
つと剛も私が喪主なんて許してくれませんか」

そう、言っただ度も頭を下げた。

その時、兄ちゃんは、死ぬまで父親のことを恨んでいたんだろう
と思い、兄ちゃんが可哀想で、目の前にいる父親を蹴ってやるうか
と思っただけだった。

でも、兄ちゃんは父親を許すことが出来たのだ。兄ちゃんが甘え
ることで、兄ちゃんは父親を許すことが出来たのだ。

そして、兄ちゃんが許したとしても、兄ちゃんの手を離れた父親
は、自分を許すことは一生ないのだろう。

「剛が死んだのを、和さんは知ってるのか」

鵜飼さんはビールから日本酒に変えて、川田さんに尋ねた。

「もう、連絡もつきませんから」

川田さんは、兄ちゃんの前にも日本酒を置いて、私の顔をチラリ
と見た。

「兄ちゃん、心残りだろうね」

兄ちゃんは、これからいっぱい幸せになるはずだった。そうでな
きゃ不公平過ぎる。

「それでいいんじゃないか、心に残したままで」

鵜飼さんは、紅くなった顔を皺くちやにして私に笑いかけたが、

私には言いわけがなかった。

兄ちゃんは、ずっと和さんから連絡が来るのを待っていたのだ。建築資材会社の蓉子さんが、バレンタインにチョコとくれたって、兄ちゃんは待っていたのだ。

私には、そうとしか思えなかった。

しかし、私の考えと川田さんの思いは違っていた。

「剛は和さんと過ごした思い出だけで、十分楽しかったんだと思うよ。飲んでる時も、よく円ちゃんのことや和さんのことを思い出して笑ってた。

俺が『いつまで未練をもってたんだよ』って説教したら、あいつ

『未練も悪くないぜ』なんて強がっていたからな」

私には川田さんの言っていることが全然理解出来ない。

私が不満そうな顔をしていると、紅い顔をした鵜飼さんが、

「未練も持てないヤツだっている。剛は、未練をたくさんもって死んでっただから、幸せなんだ」

私の顔を覗きこんで、言ったが、私にはどおしても、兄ちゃんが幸せだったとは思えない。

そんなモヤモヤした気持ちのまま、夜更けまで私たち三人は兄ちゃんの思い出を話して、結婚前夜を過ごした。

翌朝、ちよつと腫れぼったい顔の私に、結婚式場の人はずいぶん化粧に困ったようだが、もともと、スツキリとした美人ではないので、どう化粧しても、それほど変わるわけではない。

そして、控室で真っ白なドレスを着て座っていると、親戚のおじちゃんに連れられるように兄ちゃんが入ってきた。

いつもの洗いざらしの作業着を着た兄ちゃんは、ポケットに手を入れたまま、背中を見せて、「きれいだな」と言ってくれた。

「兄ちゃんのお陰だよ。兄ちゃんが、私のために貯金してくれたお金で、このドレスも借りたんだよ」

私にしか見えない兄ちゃんに話しかける様子に、おじちゃんは驚いていたが、何も言わなかった。

「兄ちゃん、萌は兄ちゃんが大好きだよ。本当は兄ちゃんのお嫁さんになりたかったけど、兄ちゃんが私のことをずっと大切な妹だと思ってくれてから、言えなかったよ。」

でもね、今は川田さんが大好きだから、兄ちゃんは天国で好きな人をさがしなよ。

和さんが来るまで、待つてちゃだめだよ」

兄ちゃんは、私の方を振り向くとニコリと笑い、ポケットに手を入れたまま控室から出て行った。

式の間、兄ちゃんは入口の扉の横に立って、嬉しそうに私と川田さんを見ていてくれた。私は何度も兄ちゃんに向かって笑いかけると、自然と涙が頬を伝い、そのたびに川田さんは心配そうに私の顔を見てくれた。

私は兄ちゃんの照れ臭そうに笑う顔が大好きだ。だから、兄ちゃんを思い出すときは、いつも、そんな兄ちゃんの顔を思い出そうと思おう。

もしも、私が川田さんより先に死んだら、川田さんには私の笑った顔を思い出して欲しいと思うから。

兄ちゃん、天国で会うときまで、ずっと笑っていてね。

〔10〕（後書き）

最後までお付き合い頂き有難うございます。「読んだよ」の一言でも結構ですので、感想やメッセージを頂ければ嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5686q/>

花嫁の兄《あん》ちゃん

2011年2月18日17時10分発行